二〇二四年度奨学生　総評

立花　開

三月二八日、二〇二四年度奨学金給付通知書授与式に出席した。デザイン・建築・医学、そして口語詩句の受給者が集まった。口語詩句の奨学生は十六名、授与式への参加は十四名だった。一名ずつの挨拶を聞いて、それぞれの表現への熱い想いを感じた。私は授与式スピーチと通知書の授与を行った。スピーチの際に伝えたことをここにも記そうと思う。

今回、望む結果ではないという思いがある方へ、賞というのは様々な要素が絡み合って生まれたひとつの点である、と私は考えています。書き手・読み手の求めるものが複雑な時代だとも思います。私たちも真摯に、言葉と皆さんの想いに向き合い作品を読ませていただいていますが、これもまたひとつの点でしかありません。ご自分のなかに理由を探すことなく、また気持ち新たに言葉へ向き合っていただけたらと思っています。

皆さん、本当にお疲れさまでした。これからも、素晴らしい作品をお待ちしています。

西野　奏子　　東京都

麦茶飲む
チェキが写真を吐くあいだ

麦茶を飲む口、写真を吐くチェキ、という対比が面白い。生物と無機物、液体と固体、似た動きをしているけれど片方は摂取し、片方は排出している。本当はすべてのものが同時間に起きているし、それぞれ違ったことをしているものなのに、見つめたときにだけ焦点が合う。「あいだ」がとても良い。チェキと繋がってしまった主体の何か。

小池　弘実　　京都府

雨、とだけ返信が来て
胸底の
小さな街に雨が降りだす

返信、ということはその前にもやり取りがあったということ。時間をかけて紡いだ二人だけの関係の中に、ふいに降り込んだ外の世界の存在。それがどのように作用するのかわからないけれど、「雨」が「胸底の小さな街」を浮き彫りにした。恋心のことなのかもしれない。雨に濡れることで初めて分かる街の姿、突然気が付く心の変化。

奥村 俊哉　　宮城県

ピアノさぼった僕を
殴る母
ねぎのにおいがした

暗く、苦しい。「僕」を殴るまでキッチンに立っていただろう母親。殴る行為の距離の近さは、ともすると愛撫よりも近い。近すぎるものは関係から逃れられず、逃げる思考の余白も持てない。母親の支配や感情からもねぎの青く苦いにおいが漂ってくる。

吉冨 快斗　　埼玉県

冬ざれか手を見るだけにして帰る

時として抗えない力で自分を襲ってくる自分の感情がある。触れたくても触れられない、これ以上は望めない、そんな関係なのだろう。花をみるように手を見る。桜や木蓮のように触れられない高さに咲く美しい花を思い浮かべた。触れられないほど、永遠に見続けて美しい箇所を見つけ出してしまうのだ。

佐久本 倫歌　　大阪府

天国じゃみんな、名前を忘れてて
さいごのごはんの献立で呼ぶ

生きている間、私たちは絶対に切ることのできないたくさんのしがらみの中でしか存在できない。私たちを縛るたくさんのもの。天国では、その一切がなくなるらしい。「さいごのごはん」という平仮名表記がむき出しにされた欲望のようでとても良くて、哀れでかわいい様が動物のようである。あらゆるものから解放されたほんとうの自由は、他者から見たら哀れでかわいいのかもしれない。

松下 誠一　　東京都

胎内にいちまい濡れるあぶらあげ

松下氏の作風の面白いところは、名詞を起点にしたところからの詩の飛躍の豊かさである。胎内にあぶらあげはもちろんないのだけれど、あるような気がしてしまう。飛躍の成功は、この〝あるような気がしてくる〟説得力だと考えており、作者の作品にはその力が溢れ

ている。油に濡れて光るあぶらあげは柔らかく、かろうじて輪郭があるように見える。子宮の中もそのような場所なのだ。